

広瀬久兵衛の佐伯新開発田見分

日田・佐伯二重三重の縁えにし

鶴野博文

(会員 佐伯市田の浦町)

天保四年(一八三三)九月二日から九日まで、広瀬淡窓の弟久兵衛が佐伯藩御預所(幕府領)の新田開発の見分のため、幕府の役人らと共にこの佐伯に来て柏江かしわえに泊まりその事務処理を行ったという記録のある資料を日田の広瀬家の関係者から入手した。

それは「広瀬久兵衛・新開場御見分御供諸用控」という久兵衛の記録だが、この中の佐伯に関することについては、これまで十年近くの古文書学習で佐伯藩の御用日誌や庄屋の文書の中にそれらしい記事を見たことが無くや唐突な感じだった。

ところが、たまたま「佐伯史談」二二三号の校正のとき、勝間田三千夫氏の『藩学「四教堂」と先哲』の七頁天保四

年「醒齋日歴」の記に

「(幕府)御勘定小林藤之助。及び御普請役二名。江戸より至る。海西(九州地方)開墾の地を検する也。豆田町に館(宿)す。(中略)府君(郡代)中島益太を帰府せしむ。別府一郎至る。皆、開墾の役の由、国命(藩命)を奉じて来る也。益太(子玉)来訪数回。飲宴すること屢々しばしばなり。」とあり、さらに八頁に、

『これが為、西国(九州)の諸侯は、その使者を赴かせ、大歓迎したのである。

佐伯藩からは小林七郎左衛門に伴つて、日田の事に熟知し、且明府(日田官府)の墾志蒙ったことのある中島益太が介副かいぞうとして差遣された。(それで、恩師の淡窓は)「益太この度命を奉り来たつたものの、予が家を訪ねてくれたこと数回、予が大病時より九年目の相見である。』とあり、益太は佐伯藩の新田開発にも重要な役目を果たしていることがわかる。

淡窓は、益太とともに汗を流して築き上げた咸宜園の日々を想いだし、いかに悦びを隠せなかつたか、が想像でき

る。しかし、ここに「好事こうじ、魔多し」というか、この五ヶ月

後、翌天保五年四月、益太二十四歳の急逝が伝えられ急転直下、暗転した淡窓の痛恨は語るに忍びないが、それは後に子玉の墓碑銘となつて結晶したと言へる。

しかし、この豊前、豊後を主として千五百町歩にも及ぶ一大新田開発プロジェクトの話は、十六年前の咸宜園開塾と日田郡代、塩谷大四郎正義しおのやの幕府からの派遣が同年に行われたことから始まる。

主役は勿論、広瀬久兵衛だが、話の序ついでなので、中島益太（増太、益多とも）から始める。

明石大助紹介により、日田桂林荘最後の年、十六歳の入塾で翌年文化十四年（一八一七）開塾の咸宜園の第一期生でもある。これは淡窓が十四才の時、恩師松下筑陰を慕つて佐伯の四教堂に遊学するため、日田から三十七里の道を草鞋わらじばきで、一步一步踏みしめて作った佐伯・日田、人材交流の道の賜物である。

益太に続いて日田へ向学の道を進んで佐伯藩の若き秀才たちが次々に入塾し、四教堂の名を大いに高からしめたのである。

淡窓は一見して、忽ち益太の玉質を見抜き「咸宜園五子」に挙げ、一年目からわずか十六歳の益太を都講（塾頭）

並みに遇し、「史記」や「毛詩」（詩経）その他などを代講させている。（淡窓日記より）これは、一面、四教堂の教育水準がいかに高かったかの証あかしでもある。

幕府高級官僚の塩谷郡代はなかなかの教養があり、まづ目をつけたのは淡窓の資質で、行く行くは咸宜園を官学にするつもりだ、などというので、淡窓しぶしぶ儒官になったとき、優秀な側近の子玉たちとともに府公（郡代）には、節季などにたびたびお目見えしていたので郡代は子玉の優秀さも名声も熟知していて、佐伯方面の開発に中島は欠かせないと決め、儒官である彼が郡奉行小林七郎左衛門らとともに開発事務のチームに組み込まれたと思われる。

さて、この大事業の事実上の主役である久兵衛は淡窓の八歳年下の弟で三男である（二男は早世）。神童と言われた淡窓もたいへんな虚弱児だったため、とても御用人博多屋の六代当主の任には堪えられないだろうと家業相続の逆接を父三郎右衛門は決断したのだが、なんとそれは見事な大当たりとなったのである。

結論を急ぐと淡窓は儒学者として大成し、咸宜園の名を天下に轟かせ、数多の英才を明治維新に向けて送り出

し、著名な文人たちとも交流があり、その著書も君公の間でさへ尊重されたのである。

久兵衛は兄を一心に敬愛しつつ博多屋の経済力を充実させ、咸宜園を建設し、その実業家としての優れた才覚により、いち早く博多屋の信頼と名声を高め、ついに塩谷郡代の大抜擢を受けるに至り、天保三年（一八三二）四十三歳、日田の掛屋（四人）に任ぜられる。

実は、平成二十年十一月に「日田天領祭り」と同時に「特別企画 掛屋・広瀬久兵衛」展が催された。

つまり、この「掛屋」とは、タイトルとしての重みも持つており、彼の功績をも象徴しているのである。

掛屋とは、日田天領の出納を司る役目で、年貢米の収納、廻米、販売、代銀の管理などが主な仕事だが、彼らの管理運営する公金（幕府の金）の一部も有名な「日田金」（佐伯藩では日田錢とも・御用日記）の基礎を成すもので、これに日田の有力商人の投資金その他を加え、諸大名などに貸し付けをするなど、大銀行なみの金融機関となり、年一割五分の金利だが、借りる方は、全て幕府の公金（天領だから）と思っているのでも、もし踏み倒すような事が暴れるとお家の一大事なので、貸し倒れが無く、日田天

領、日田商人は大繁栄し、佐伯藩も御他分にもれず日田貸付金の記録を天保七年の郡方御用日記にも何カ所か残している。

例えば、四月二十六日の記事に、

「一、日田御貸付金、拝借証文、仕替え（更新）の儀、先日、同表（日田）より申し越し候。御勘定人、児玉惣右衛門、日田へ罷り越し候よふ仰せつけられ候に付き……」などの記述があり、佐伯藩への連絡は、日田の御用商人らしい俵屋幸六の名がたびたび出てくる。

掛屋ができたのはほぼ百年前の享保時代だったというが、其の頃は隈の鍋屋（森）と豆田の丸屋（千原）の二軒だけだった。

鍋屋の先祖は毛利高政の家臣で、許されて日田に残ったという。森という苗字から毛利一族らしいが、藩主が移封するのに居残りを願うというのは不自然で、後のお家のため、願うでなく命ぜられたのだ、と思われる。だが、これも大当たりだった、というのは鍋屋はこの頃日田有力商人の筆頭であり、同じく武田武士の血を引く博多屋とも好い協力関係だったからである。

ところで、久兵衛が塩谷郡代の信頼と抜擢を得るに至

る経緯には、「小ヶ瀬井手」の開通と「日田川通船」工事の宰領を見事に果たした事が第一のきっかけである。

秀吉が朝鮮出兵の際に目をつけ、後に腹心の毛利高政に託した日田は、九州水陸交通の要の地だったが当時は肝心の隈川を、日田に集まる年貢を長崎に廻米するのに利用できず、三里余りの難儀な山道を、馬一頭で日に三俵、下流の堰まで運び、そこから舟で筑後へという大変非能率な廻送方法に頼っていた。

ところが、新任の塩谷は歴代の郡代のように無事難難にお勤め大事ばかりの人間ではなく、実質十五万石の名以上の権力も背負っており、何か自分の夢を実現せずにはおれないというエネルギーな人間だった。

明治維新後、日田県知事をやった松方正義は塩谷郡代に心酔し、もとの助左衛門から正義に改めたという程の人物で、それが久兵衛の才覚、実行力、精神的粘り強さと結びついたのである。

塩谷郡代着任後二年目に、久兵衛は、日田川通船の意向を郡代から伝えられた。すでに淡窓は儒官を命じられていたが、これに猛反対だった。

国家の利害や権力に庶民は係わるべきではなく、もし

間違えば、広瀬家や久兵衛に災難が及ばぬとも限らぬ、と淡窓は考える。

一方、久兵衛の方は、郡代から、博多屋と現当主の自分にかけている強い信頼と期待を活かすことに挑戦すべきであり、なまじ固辞して無難を選べば、博多屋は衰退し、咸宜園の発展は勿論あり得ないかもしれないと思つた。

そもそも、博多屋は四つの藩の御用商人だったが、父の代、鍋屋(森)、丸屋(千原)などが、年商二百貫(約五億円)といわれるとき、四十貫(約一億円くらい)で、しかも前者がほとんど自己資金であるのに、博多屋は自己資金は十貫ほどで、あとは、藩の公金などを流用していたのである。久兵衛はこの頃、これを、八十貫くらいまで伸ばし、三、四十貫は要するという咸宜園を建設したばかりのところだった。(時価は林寅喜氏の試算参考)

ここは一番、郡代の、久兵衛しかいないと抜擢して申し付けた意向を無理難題と思わず、人生の一大チャンスと捉え、薩摩人が言う、「泣こよか、ひっ跳べ。」ではないか、と淡窓に無い度胸を定めた。

このとき、久兵衛の心は、淡窓と完全に逆転しており、

自分が長兄に成り代わり、全身全霊を挙げて郡代の大開発プロジェクト達成に向かつて突き進むことになる。

さて、問題の日田川通船だが、これに関しては、豆田地区は官府に近い方で、地形は高い。対照的に隈地区は隈川に近く低地である。通船問題については、その利害について過去対立的だったが、それはここでは省略する。ともかく、豆田の久兵衛を宰領として、同じく豆田の升屋(草野)の協力で着工が始まった。

久兵衛のアイデアは簡単に言うと地形の高い豆田の中心から人工の運河を作り、しかもパナマ運河に応用されている「閘門式」を考え出したことである。水量が少ないのと豆田からの地形段差を補うために幾つかの堰を作って水を溜め、水深が足りたら、水門を開けて、一気に年貢船を下流へ通す。因みにパナマのほうは一九一四年の竣工である。久兵衛は子供の笹船が湯船から縁を超えて溢れ出すのにヒントを得た、と言われている。

次の難問はその運河(ここでは井手)に流す水量が足りない。その理由も省略するが、とにかく何里も離れた玖珠川から引いてくる、という。

これまた、奇想天外のアイデアで、先ず無謀な工事だと

反対される。久兵衛は、その何里もの間の土地に数十町歩の新田を開けば、二百石の収益があると考え、同じ豆田の經理に明るい升屋(草野)の理解と協力を求めた。

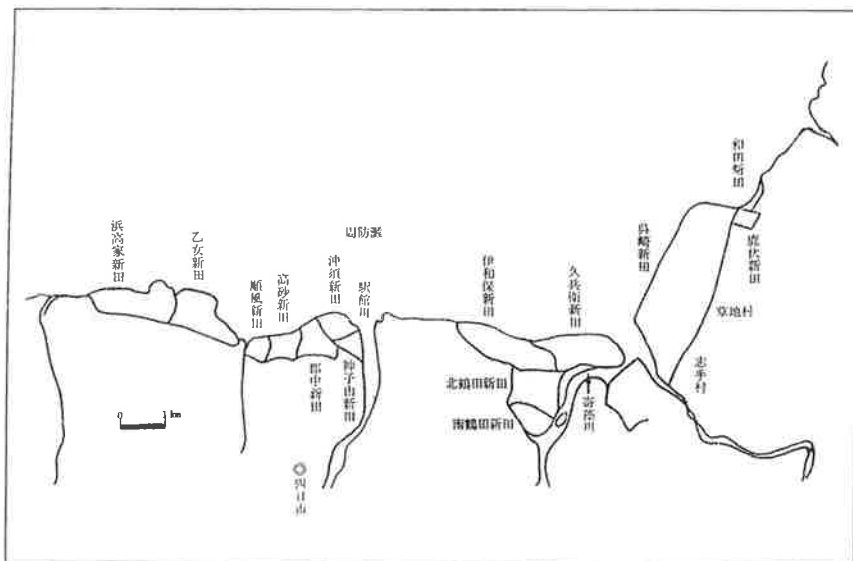
日田通船と小ヶ瀬井手の事業が果たした一二二鳥の大成功からヒントを得た塩谷郡代は、久兵衛の才覚を益々信賴し、いよいよ空前の、桁違いに大規模な、豊前海岸の埋立て大新田開発を発想する。

しかし、肝心な造成費用は、地元の負担で、労力も提供し、その上に、引受人(開発地主)という責任者が決められるのである。郡代は、企画書を出し、造成費用を関係の地域に賦課する許可を幕府からもらうだけで、事実上の施工責任者は広瀬久兵衛たちである。

文政九年(一八二八)四日市陣屋に、宇佐郡内の庄屋などを集め、開発すべき新田の割付が行われた。

例えば、「第三番(区域)岩(伊和)保新田、鳥原領、堤防長二千六十間、反別七十町歩、工費銀四百六十貫、誰か引き請ける者はおらぬか。」という具合である。

こんな大工事をはたして完成できるか、堤防の長さ、高額の費用、工事が順調に出来ぬと、どういふふうか、責任を問われるか、相手は変化の激しい海である。やすやすとは



塩谷郡代による豊前・豊後新田開発

引き受けられない。

しかし、これに隣接する和間新田、堤防五百四十間、六町五反、工事費銀五十貫は久兵衛独りで引き請けたので「久兵衛新田」として今に残っているという。

以上は、駅館川^{やぐかん}西岸の開発地域だけで、引請人が乗り気でない土地だったが、総反別百三町歩、七百十貫の事業が決定し、其の前の呉崎新田の三百五十町などと合わせて、約五百町歩に達せんとする勢いで、最終的には、日田郡代の支配地域すべてで千数百町歩といわれている。

さて、天保四年（一八三三）十四新田が完成、いよいよ幕府の工事検査（見分）が始まる。

六月一日から九月六日まで、幕府勘定吟味改役並小林藤之助、御普請役直井弥六、同岡野雄之助、その他十五名の立会いの下で行われ、日田郡代の支配地域総てに互^{わた}っているが、ここでは佐伯藩に関する部分に留める。

この前の年、久兵衛は掛屋を拜命、常に塩谷郡代の身边にあり、一切の手配をし、「新開場御見分御供諸用控」を著している。（以下口語意識で述べる）

五月二十六日 府内より佐伯までの新開をなすべき絵図
面九十郎へ認めさせる事。

九月一日 佐伯御郡奉行御代官役 お出迎えのため

白杵までお越し。

九月二日晴 明け七つ時(四時)より増田様のお供でお

先に出立、赤目野内床来(木)でお昼休み
夕七つ頃柏江に着き、直に津志川内村、入
江御見分、殿様方は夜になってお着き。

九月三日晴 五つ(八時)頃より御普請役様方、御元締

め方ご一同津志川内村枅北(形)ご分見、
お取出木立村八条ケ鼻(茶屋ケ鼻)迄、お
取付御仕廻夕方お着き。

九月四日晴

一、朝五つ半時頃より、御普請役様歴々、元締め方ご一
同津志川内村並びに佐伯御領域城村新田とやしま
中州御見分、それより津志川内村新田にて地方じかたの境
通り御見分、それより、お昼休み、汐引き跡の処御
見分の上、七つ頃ご帰宅。

一、佐伯御預所庄屋中へ面会(「庄屋」と「村」略)

津志川内 甚市 柏江 雅五郎
塩付(汐月) 弥四郎 石打しうち 嘉三吉
棚野 吉右衛門 泥谷ひしや 安右衛門

府坂 藤左衛門 西野さいの 卯兵衛
波越なみこぎ 助兵衛 床木 又兵衛

一、佐伯御領堅田村組大庄屋入来る。芦刈為五郎。

九月五日 とやしま新田、御料私領共に御高入りの

年号、反別を書き出すようお沙汰があつ
たので申し渡す。

九月六日 新開御絵図面が出来たので、御預所代官

並びに御私領御郡奉行を呼び出し、引受
人などを糺ただすよう申し渡しがあつた。

九月七日(木立関係)

一、久兵衛と幸六が江頭大庄屋宅佐伯御郡奉行衆の旅
宿へ行き、新開引き受けについて話すと、木立の林
船入の所に新田ができるかと小前たちが困るので新
田岸廻り八十間程の船道をあけて下さい。(その代
わり)用水溜めとして残して頂いた所は船入りに
しても、用水は何とか差し支え無いよう取り計ら
いますから、と伝えられたので服部様迄申し上げ
た。

一、御普請役様より、久兵衛、幸六御召出し、佐伯表内
歎なげき(訴え)の趣に随い、船道を空けてやるが、そう

すれば、絵図面朱引きの所が違ってくるので明日仕替えて渡す。また御預所引き受けの方も村方でのくらい引き受けるか、御預主よりのくらいの御加勢があるかなど知りたいと、申し付けがあったので、中島益太まで申し伝えて置いた。

九月八日

一、新開(新田)引受人を確かに取り決めるよう、さらにご沙汰があったので左の通り申し上げます。

一、堤、延長凡そ千間程

此の諸入用金千二百五十両程

内金 津志川内村 請

但堤 三百五十間

内金三百両伊勢守様(高泰)より御加勢

同 泥谷村庄屋 安右衛門請

同 同村 百姓 万兵衛請

同 柏江村庄屋 雅五郎外二人請

同 木立村 請

日田と佐伯藩の経済組織を比較すると、林寅喜氏の調査による幕末時、藩の収入の六割が江戸、京都、大坂藩邸の費用で、残りは参勤費用と家臣の給料だから、浦で持つ、とは言い条、日田のお貸付金も利用している。

天領は、いわば一國二制度で、雇われ領主、人件費なども極端に軽い。そこで地元の格式にとられない掛屋など実力主義の民間活力を利用して豊かになり、周囲の領主に権力と金で絶大な影響力を与えている。

このように幕府権力と日田金の勢いが佐伯はおるか日向まで達したということである。

しかし、塩谷郡代も、天保の飢饉により造成費支払いに苦しむ百姓から開発費汚職の疑いをかけられ江戸召還(解任)となり、疑いは晴れたが、二の丸留守居役となる。

佐伯の天保七年の御用日記四月十八日に記載がある。久兵衛も側近として大いに謹慎していたが、次の郡代の調査の結果、逆に功績を認められて終わつたのである。

以上、要点のみを述べたが、ここでも規模は小さいが、海岸の埋立て式が主である。